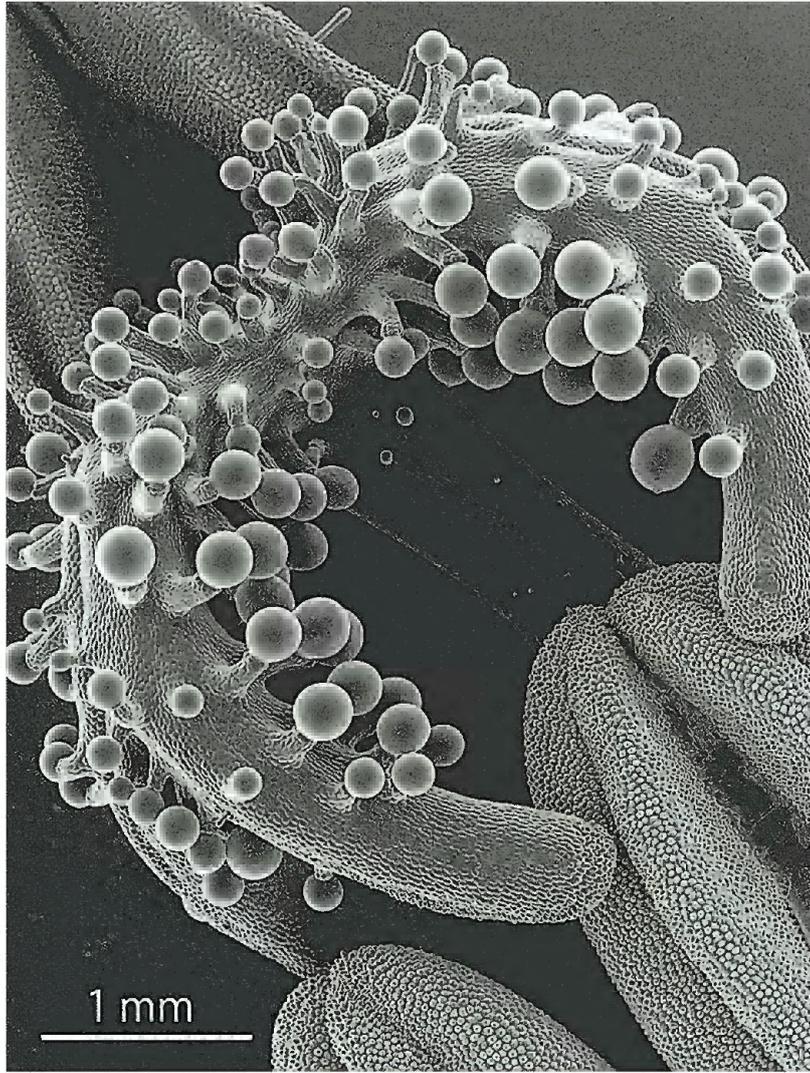


# 雌しべに並んだシャボン玉



突起の先端がシャボン玉のような球体になっているホトトギスの雌しべ 馬場博士提供

突起の先端にいくつも並ぶきれいな球体は、子どもたちが空に飛ばしたシャボン玉のよう。工学院大総合研究所の馬場美鈴博士(70)は、夏に咲くホトトギスの花を電子顕微鏡で拡大撮影し、雌しべに形成された「ミ・芽」に満たない小さな腺毛状突起の姿を捉えた。

馬場さんは大学2年の講義で電子顕微鏡に出会って以来、酵母の電顕解析などを専門としてきた。2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典・東京工業大名誉教授と共同研究し、細胞内の不要物を分解する「オートファジー現象」を撮影している。

新型コロナウイルスの感

染拡大で通常の研究を続けることが難しくなる中で始めたのが、植物の電顕撮影。身近な存在ながら、肉眼では想像していなかった植物の「一生懸命に生きる一瞬間の姿」を知った。最も目を引く写真に「シャボン玉が並んだ」と名付け、今年度の日本顕微鏡学会写真コンクールで優秀作品賞を受賞した。



大きさの異なる突起の機能はわかっていないという。馬場さんは「撮影のタイミングが少し違うだけで植物は異なる表情を見せて、不思議に満ちている。写真を通じて、多くの人が自然に興味を持ってくれれば」と話す。

(天)